
『dejavu』

阿傘 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『dejavu』

【Nコード】

N4881BA

【作者名】

阿傘 唯

【あらすじ】

小説『case』4部作の続編です。

高校を卒業し、大学生になった『唯』と『七海』の身に起こる『デジャビュ』とは…？

『ギャグ』と『ファンタジー』を無理やり融合させた、無計画小説『dejavu』をよろしくお願い致しますぞよ。

dejavu1(前書き)

小説『case』4部作の続編ですが、この作品から読んでも大丈夫にして行くつもりです。

ある晴れた日、僕は2年前の事を思い出し出していた。

僕がまだ、高校生だったあの頃に『あんな事』が起きてから早2年が経つ。当時はテレビや新聞などで、世間を賑わしていたが、2年と言わず、1ヶ月もすれば、人々からあの事件は忘れ去られていた。

「記憶…、ね…。」

僕は一人言を言いながら、大学へと向かっていた。

僕が通う大学、『新東京文芸技術大学』（通称東芸大）は、まだ出来たばかりの大学で、僕らが第一期生である。つまり、全員が新入生であり、先輩も後輩もない。

「あ、唯！遅いわよ！待ちくたびれちゃった！」

校舎の入り口で、ひと際大きな声で呼んでくる女の子。

「ごめん、七海。美樹が忘れ物しちゃったみたいで、ついでに届けていたんだ。」

僕は、目の前の女の子に謝る。

「もう、美樹ちゃんのせいにして。どうせまた、ボケっとして電車に乗り遅れでもしたんでしょ？」

女の子は僕を詰る。

「ま、いいわ。行きましょ？」

女の子はくるつと踵を返し、僕の前を歩く。

彼女の名前は『阿傘 七海』（あがさなつみ）。高校生の時に知り合ってから、今までずっとこんな調子だ。

いや…、普段はこんなもんじゃないか…。

僕は、今まで七海にされてきた仕打ちを思い出し、少し頭痛がしてきた…。

「どうしたの、唯。志茂田景樹が豆鉄砲食らったような顔をして。」
「どんな顔だ！『鳩が豆鉄砲』だろ！しかも使い方間違ってるし！
謝れ！景樹さんに謝れ！」

「『景樹さん、過激な事を言っただけですイマセン。』」
「ウマくない！？全然ウマくない！しかも棒読み！？心こもって無い！」

「景樹さん、心を込めて、過激さん。」
「なぜ五七五にっ！？しかも意味全く不明っ！？」

「何よ。あなたが『謝れ』って言ったから、謝ったんでしょ？その
…『ハデス』さんに。」

「『景樹』さんて今自分でも言えたでしょうが！たしかに『ハデス』
さんばいっけど、て僕の馬鹿！？」

「あ…。やっぱり、七海は今日も絶対調だ…。僕もだけど…。
そんな馬鹿なやり取りをしながら、僕らは、まだ新品の教室に入る。

「やっぱり、綺麗よね、この大学。」

七海は嬉しそうに言う。

「さすがは『新設大学』だけあるわね。偏差値高かったから、絶対
に受からないと思ってたけど。」

僕もそうだ。ホント、よく受かったよな…。しかも、二人して…。
「一緒に勉強頑張ったもんね？試験近くなんか、ほぼ毎日徹夜で。」

七海は笑顔で続ける。僕は、七海のこの顔が一番好きだ。

「美樹ちゃんや、真夜ちゃんまで一緒になって頑張ってたもんね？」
美樹と真夜、というのは二人とも僕の妹だ。血は繋がっていないけど…。

「二人とも、無事私達がいた高校に合格したし、全員まとめてハッ
ピーよね？」

七海ははしゃいでいる。

そう言えば、あれ以来、七海はこういう笑顔をよくするようになった。

やっぱり、ずっと重荷を一人で背負っていたんだな…。

「唯？聞いてる？」

「え？…ああ。ちゃんと、聞いてるよ。」

また僕は、昔の事を思い出していたようだ…。

最近特に多いよ…。

「そういえば、七海。今日のレポート持って来たぞ。お前、自分の分忘れてっただろ。」

僕はカバンからレポートを取り出す。

「あ！そうだ、もう一度確認しようと思って、テーブルに置いたままだった！サンキュ、助かる！」

意外にこういう所は、抜けてんだよな…。

僕は七海にレポートを渡し、後ろの方の席に座る。

この『東芸大』は文学部だけの大学で、授業は全て選択制。必須授業というものは無い。

自分の履修したい科目の単位を取り、4年生になったら、目的の研究室に所属し、卒業研究のテーマを決め、最後に研究発表に合格すれば、晴れて卒業、といった具合である。

「なあ、この学校って僕らが第一期生だろ？」

僕は、七海に聞いてみた。

「じゃあ、4年生で卒業研究するって言っても、先輩もいないのに、何を研究すればいいんだろっな？」

普通の大学では、先輩の研究を引き継ぎ、それを研究発表し、また後輩に引き継ぐ…とかなんとか言ってたのを、僕は思い出していた。

「そうねえ…。」

七海は考え込む。

「自分達で、自由に決めていいんだってさ、唯君。」

「え？」

ふいに後ろから声を掛けられ、ビックリする。

「おはよう。今日は遅い登校だね。阿傘さんも、おかんむりだったんじゃない？」

少し髪色が茶色がかった、中性的な顔立ちの生徒が声を掛けてきた。

「なんだ、レイじゃん。珍しいな、お前が午前中から学校にいるなんて。」

こいつの名前は『九真桐 零』（くまぎりれい）。女みtainな顔をしているが、れっきとした男だ。

「あら、クマくん。おはよう。」

『クマくん』とは七海がレイに付けたあだ名だ。僕と同じ呼び方をしない所が、七海らしいが…。

「ふふ。お邪魔だったかな？」

レイは含んだような言い方でそう言ったが、根は良い奴っぽい事を僕は知っている。

「そんな事ないさ。今日は、お前も授業に出るんだろ？」

「ああ。たまには出とかないと、一年生で留年になっちゃうしね。」

レイは笑いながら言った。いや、笑いごとではないと思うのだが…。

僕らは、三人で長椅子に座り、午前の授業を受ける事にした…。

「ふう。久しぶりに授業に出ると、肩が凝るもんだね。」

レイは片手で肩を揉みながら言った。

「普段からちゃんと出席していないからだぞ？レポートだって、急いで僕のをまる写ししてたし…。」

僕は、ぶすつとした表情で言った。

「あはつ。そんな顔も可愛いね？唯君。」

「お前まで、そんな事を言うのか…。」

僕は、いつも七海に似たような事を言われているから、慣れている

が…。

「クマくん？唯は渡さないわよ？」

「おっと、怖い。気を付けないと。」

そんなレイと七海の会話を聞き流しながら、僕らはお昼を食べるため、学食へと向かう。

「この学食って、どうしてこんなに安く出せるのかしらね？」

七海が聞いてきた。

僕は、基本的には『お弁当派』なので、高校の時と同様、大学にもお弁当を持参（もちろん七海の方も僕が作る）しようと思ったのだが、あまりにも学食が安く、しかも、僕のこの舌を唸らせるほどのおいしさとのコンボを食らってしまい、お弁当持参は1週間でやめる事にした。

今は、美樹と真夜の分のお弁当しか作っていない。

「新設の学校だから、特別に学校側で費用の大部分を負担しているんだってさ。」

僕の代わりにレイが答えた。

「へえ、ずいぶん気前が良いんだな。」

僕は関心した。

しかも、あの味を出せる料理人まで雇っているなんて…。

「まあ、お金がある所には、あるって事なんじゃない？」

七海はやれやれ、といった表情で答えた。

ともあれ、毎日の生活費も馬鹿にならない僕らとしては、こんなにありがたい事はない。

親がいない僕や七海にとっては、少しでも節約しながら過ごせれば、それに越した事はなかった。

大学の費用も、一生懸命勉強した甲斐もあって、奨学生として入学させてもらえたり、後は社会人になってから、いくらでも返す事は

出来るだろう。

「唯、何食べるの?」

七海が聞いてくる。

「そうだな…。この『味噌煮込みうどん』にしようかな。」

「僕は、『和風御膳セット』にするよ。」

レイも、僕に合わせて答える。

「あなた達、渋いの選ぶわね。じゃあ、私は…。」

七海は食券販売機とにらめっこをしている。

「この『みそ!煮込みうどん』にするわ。」

「同じじゃん?!?」

「違うわよ。この『みそ!煮込みうどん』にするんだもの。」

「言い方じゃん?!?イントネーション変えただけじゃん!?!」

「だって唯が、私が食べたかったものを先に言うからいけないのよ。」

「

「認めた!?!なら、『私も同じものにする』とか、可愛く言えばいいじゃん!?!」

「『私も同じものにする』」

「レイ!お前にいったんじゃねえ!お前は『和風御膳セット』だろ

!」

「唯の馬鹿。」

「誰が馬鹿!?!」

「『唯の馬鹿?』」

「だから、真似するなレイ!しかも『?』は付いていなかったぞ!」

僕は大きく喚き散らしながら、七海と二人分の『味噌煮込みうどん』のボタンを押した…。

お昼時にもなると、この食堂もほとんどの席が埋まる。僕らは、
ようやく三つ開いている席を見つけ、お盆を置いた。

「やっぱ、みんな食べにくるよな。」
僕は言った。

これだけ安くて美味ければ、みんなここで食べるだろう。

「こんなに広い食堂でも、ほぼ全員、昼食を食べにくるんだから、
混雑して当然だろうね。」

レイは言う。たしかに、そうだ。

「みんな、お弁当くらい作れば良いのに。大学生にもなって…。」
料理の一つも出来ない七海さんが、よくおっしゃる、なんて口が裂
けても言えない…。

「そう言えば、君達って同じ『阿傘』って名字だよな？」
急にレイは話題を変えた。

「もしかして『学生結婚』とか？」
「やっぱ、そう思われても仕方ないよな…。」

「そうよ。」
「違います。」

七海の答えに、僕は即答した。

「何よ、似たようなもんじゃないの。」
不機嫌そうな七海。

そう。僕らは同じ『阿傘』という名字を持っている。

僕らだけではない。美樹や真夜も同じ名字だ。

『ある理由』から、僕と美樹、真夜の三人は『名字が無い』のだ。
いや、名字が無い以前に『名前すらなかった』のだ。

僕に『唯』という名をくれたのは七海で、妹二人に『美樹』と『真
夜』という名前をつけたのは、僕だ。

これは、僕が高校時代の頃に遡る出来事。

話せば長くなるから、今は省くけど。

ともかく、そういった理由で僕ら3人には『名字』がまだ無かった。2年前の事件の後、七海が自分の籍に僕らを迎えてくれて、市役所で手続きを踏んで、僕らは正式に『阿傘』の一員となったわけだ。

「まあでも、『家族』には違くないかな？」

僕は恥ずかしげもせずと言った。

「ヒュウ」

レイは口笛を吹く。…なぜ？

「これでわかった？クマくんの入り込むスキなんて、これっぽっちもないって事。」

入り込むって…。僕は、そっち系ではないんですが…。

「わからないよ？愛には国境も、世界をも超える力があるのだからね。」

レイ…。お前の言っている事は、さっぱり意味が解らん…。

二人の目が火花を散らせている…。なんの戦いなんだ、これは…？

「ま、今は一時休戦と行こう。食事が冷めてしまうし。」

「そうね。冷めた煮込みうどんなんて、煮込んだ意味、無いものね。」

「

二人は、お互い納得した様子で、食事を始めた。

「はあ…。」

僕は、この先、いつたいどんな大学生活を送るのか、不安いっぱい溜息をついた…。

世界に『あの事件』が起きてから、今年で13年目を迎える。

世間では、この『13』という数字を不吉なモノと捉える人がかなり多く、今年もあの年のような『世界の常識を覆す事件』が起きるのではないか、などと囁かれていた。

「七海、この新聞の記事読んだ？」

僕は、居間でテレビを見ている七海に声を掛けた。

「ごめん、今良い所。」

「そうだよ、お兄ちゃん静かにしてて？」

七海は妹の美樹と食い入るようにテレビを見ている。

この状態になったら、何も耳には届かない…。

「あ、真夜読んだよ？その記事。」

隣に座っていた真夜が、代わりに応えてくれる。

うん、真夜だけだよ。僕の気持を汲んでくれるのは…。

「もう、13年にもなるんだね…。『平成』が終わって『龍碌』(りゅうろく)に年号が代わったのって…。」

そう。世界が『あの事件』によりほぼ壊滅したあと、日本では『平成』が終わった。

「でも、この『龍碌』って、あいかわらず読みにくい漢字だよな？」

真夜は不思議そうに言う。

「誰だっけ…？ほら、あの偉い人…。あの人が付けたんだよね？『龍碌』って。」

真夜が言っているのは、テレビで新しい年号が書かれた紙を報道陣に見せていた、あの政治家の事を言っているのだらう。

「あの偉い人も、テレビに出た3日後かなんかで、死んじゃったんだよね、たしか。」

そういえば、そうだったような…。僕は記憶がはつきりしない。

「でも、満足だっただろうね、その人。だって、最後に目立ってたもん。」

本当にそうだったなら、きっと家族も浮かばれるだろう。

「あー、もう！なんてクライマックスなの！」

テレビを見終えたらしい七海が、文句を垂れながら僕らのいるテーブルに着く。

「本当だよ。なんであそこで、きつちりと告らないかなあ？あれじゃ、亜美ちゃんが可哀そうだよ！」

美樹まで文句を言っている。

なんだか、恋愛ドラマでも見ていたらしい。

僕は、二人が席に着くと、コーヒーを入れるため、台所に向かった。

今、僕の家では、僕を含め、七海、美樹、真夜の4人で暮らしている。

まあ、『4大家族』というやつだと思う。

家事全般は、僕の役割で、逆に手伝って貰おうものならば、仕事が減るところじゃなく、どんどん増えていくので、気持ちだけ貰うようにしている。

元々、美樹と二人暮らしだった時から、僕の仕事ではあったので、その後真夜が増えても、七海が増えても、さして労力は変わらなかった。

部屋の掃除もどうせ全部やるのだし、お弁当も一人分でも4人分でも、たいして変わらなかった。

「ねえ、唯。さっきなんか言ってたわよね？」

4人分のコーヒーを入れて僕に、七海は声を掛けてきた。

「ああ、その新聞の記事の事だよ。」

僕は振り向きもせずに言った。

「ああ、これね。ふーん、もう13年になるんだ…。」

七海は、少しトーンを下げて言った。

「ま、当然そうだよな…。」

「もう、気にしなくてもいいんじゃないか？」

僕は、お盆にコーヒーとお菓子を乗せ、テーブルに戻った。

「うん…。分かっては、いるんだけどね…。」

七海はコーヒーを受け取りながら言った。

「今の世の中だって、悪くないと思うよ？」

僕は言った。

これは本心だった。

「前も言ったけど、『そのおかげ』で僕も、美樹も、真夜も、『こ

こにいる』んだから。」

僕は七海の目を見て言った。

「…うん…。」

七海は小さく頷いた。

「それよりも、明日は日曜日だし、4人でどこか遊びにでも行こう？」

僕は、話題を変え、3人に提案した。

「あ、美樹ねえ、ハイキングに行きたい！」

美樹は嬉しそうに言った。

「真夜は海がいいな！」

真夜も嬉しそう。

「七海は？」

「そうねえ…。」

七海は少し考えてから言った。

「私も、たまには海に行きたいかな。」

「え〜！？絶対ハイキングだよ〜！」

美樹は引かない。こういう所は頑固だ。

「じゃあ、川に泳ぎに行くっていうのは？これならハイキングも出

来るし、泳ぐ事も出来るぞ？」

「あ！それいい！」

真夜が食いついた。

「唯にしては、良い提案ね？」

七海も少し気持ちが悪くなってきたようだ。

「じゃあ、決まり。僕は明日のお昼のお弁当作るから、みんなは持つて行くものを準備しておくように。」

「はい！」

美樹と真夜は元気に返事をし、部屋に戻って行った。

「ふふ。まだ子供みたいよね？もう高校生なのに。」

七海は優しい笑顔で言う。

「まだ、子供だよ。16歳になったばかりなんだから。」

僕は、ようやく冷めたコーヒートを口に運び、言った。

「あなたも、熱いコーヒーが飲めないようじゃ、子供よね？」

これ見よがしに、七海が言う。

「しょうがないだろ？猫舌なんだから…。」

こんな、何ともないような会話が、僕にとって一番の幸せだ…。

次の日の朝、空は快晴。絶好のハイキング日和になった。

僕は、昨日作っておいた4人分のお弁当と、今朝作ったお味噌汁を魔法ビンに入れ、カバンに詰める。

自分の荷物は、昨日のうちに準備をしておいたし…。

「七海、真夜、美樹！準備は出来てるか？」

僕は2階に向けて声を掛けた。

「もうちょっと待って！やん、七海お姉ちゃんそんなとこ、さわらないですよ。」

「良いではないか、良いではないか。減るもんじゃなしに。がはは

はは……。」

「あ、真夜も混ぜて！えいつ！」

「こら、真夜！ブラ返してよ！」

はあ…何やってんだか…。

年頃の女の子3人なんて、こんなもんなのかも知れないな…。

僕は、3人を放っておいて、玄関に置いた荷物を車に積む。

昨日のうちにレンタカーショップに電話を掛けておいて、さっき車が届いたばかりだった。

僕は、大学に入り、すぐに免許を取りに教習所へ通い、2週間かけて免許を取得していた。

さすがに、車を買うお金は無かったが、なぜかペーパードライバーなのに、運転慣れしている感じが、自分自身にはあった。

「記憶…ね…。」

僕は、昨日言った一人言と、同じ事をつぶやいていた。

最近記憶の事で、思い返す事が多くなったよな…。

そんな事を考えながら、僕は車のトランクを開けた…。

僕は、3人を車に乗せ、日立中市にあるというハイキング場へ向かい、国道3号線から高速道路へ入った。

「ちょっと、唯。あなたペーパーのくせに高速なんて乗って、大丈夫なの？」

助手席に座っている七海が訝しげに聞いてきた。

「うん。なぜだか分からないけど、運転慣れしてるみたいなんだ、僕。」

「なによ、それ。意味分かんない。」

七海は自分が馬鹿にされたのかと思い、ぶすつとした表情で言った。そんな顔されても、僕だつてなぜ、こんなにも運転がスムーズに出来るのか、説明出来ない。

「ま、あなたつて、変わった所、あるからね。」

あなたには言われたくありませんよ…、と僕は心で言い返した。

「あ！海が見えるよ！」

真夜が後ろのシートから窓を開けて、身を乗り出して海を指差した。

「真夜。危ないから、身を降り出すんじゃないやありません。」

「はい。」

真夜は言われた通り、元の位置に戻る。

「お兄ちゃんて、そういう所細かいよね。」

美樹は頭に手を組み、あぐらをかきながら言った。

「七海お姉ちゃんも、大変だね。お兄ちゃんがこんなだと。」

「あ、わかる？美樹ちゃん。」

「『こんな』とはなんだ、『こんな』とは。」

僕はバックミラーで美樹を睨みつける。

「優しくて、かっこいいお兄ちゃん、って事で。」

「あ、あと、料理も上手で、やさしいよ?」

「それと、エロ河童でロリコンよね。」

「最後のは不採用!」

僕は、ロリコンエロ河童呼ばわりした七海のおでこにチョップをかました。

「あ、美樹。後ろの席にお菓子とホットティーがあるから、みんなに回してくれるか?」

「はい!そういう事なら、喜んで!」

美樹は座席のカバンから朝に僕が用意しておいた、お菓子とお茶を取り出す。

「あいかわらず、準備がよろしい事。」

七海はあきれたような言い草だ。

「ハイキング場に着くまで、車に乗ってるだけじゃつまらないだろ?」

僕は横目で七海を見ながら、車を目的地へ走らせた。

ハイキング場のある日立中市は、そのほとんどが山々に囲まれた、緑豊かな街だ。

すぐ近くに、全国でも有名な大きな病院があるだけで、それ以外はほとんどが森林、といった感じである。

僕は高速を降り、信号の無い県道を山の方角へ向かう。

「うっ…。ちょっと、酔ってきた…。」

美樹が気持ち悪そうな顔で言った。

「大丈夫?美樹ちゃん。私の膝に頭乗せて、横になっていいよ?」
真夜が心配そうに言う。

「私も、あなたに膝枕ひざまくらして欲しいな？」

「運転中ですお断りです。」

僕は、七海の猫なで声を軽くかわし、運転に集中した。

「私も、あなたに股枕またまくらして欲しいな？」

「どんな枕だっ！？異物が当たってまうやる異物がっ！」

「そんなに、おつきくしなくなつて、いいじゃない。」

「おつきくなつてません！」

「あら、間違えた。『そんなにおつきな声で言わなくてもいいじゃない』だつたわ。」

「それだいが危険な間違いよっ！？青少年育成条例に引つ掛かるくらい！」

「パンツに引つ掛かるくらい、あなたのものは大きくないわ。」

「何の話！？『大きくないわ』て、あんた見た事ないでしょがっ！？」

「あるわよ。唯がぐつすり寝ている時に。」

「夜這い（よばい）！？あなた僕に夜這いしに来た事あんの！？」

「そうよ。それに腹這い（はらばい）もね。」

「腹這いも！？それどんなシチュエーション！？詳しく聞かせて！」

「今晚教えてあげるわ。」

「よし！今夜は七海をゲットだぜっ！つてあほかっ！？」

これ以上七海と会話を続けると、道路を飛び出して、崖から落ちてしまいそうだし…。

僕は、会話を切り上げ、運転に集中する事にした…。

ハイキングの駐車場に着いた僕らは、トランクから荷物を取り出し、山中にあるというペンションに向かう。

このペンションは無料で登山客やハイキングにくる家族連れに貸し

出しているというもので、今の時期はそんなに利用客がいないという事で、予約もせずに借りる事が出来た。

「でも、ペンションが無料なのは良いとして、そこまでの道のりがね…。」

僕らがいるキャンプの駐車場からペンションまでは徒歩で向かうしかない。

あまり利用客が少ないのも、こういった不便さもあるのかもしれない。

「わがまま言うなよ、七海。空いていただけでも、よかったじゃないか。」

僕はたしなめるように言った。

「私、ペンションに泊まるのって初めて！」
真夜は嬉しそうに伸びをしながら言う。

「美樹は、昔お兄ちゃんと別のところ行った事あるけど、でもやっぱり久しぶりだよな？」

美樹も嬉しそうだ。

「ああ、だから今日は目いっぱい楽しもうな。」

僕は二人の頭を撫で、荷物を持ち、歩き始めた。

「お兄ちゃん、私のも持って？」

「僕はあなたのお兄ちゃんではありません。」

七海がここぞとばかりに加わってきたが、軽く流し歩き始める。

まだ夏休み前という事もあり、あたりは静かで気持ちのいい風も吹いている。

あたりは自然に囲まれていて、小鳥のさえずりや木々の擦れ合う音が、心のモヤモヤをも払いのけてくれるようだ。今日は本当に良い日だ。日ごろの行いが良いからかもしれない。

「ねえ、まだ？」

美樹が歩き疲れたような声で聞いてくる。

「もう少しだと思うよ。ほら、看板が出てる。」

僕は看板を指差しながら言った。

「げ！まだ歩くんじゃない！美樹疲れた！」

美樹はその場にしゃがみ込み言った。

「もう、だらしがない…。そもそも美樹が『ハイキングに行きたい

！』って言ったんだぞ？」

「そうだけ…。こんなに歩くと思わなかったから…。」

日ごろから家に閉じこもってゲームばかりやってるからだろ…。

僕は溜息混じりに小さくつぶやいた。

「少し、休憩するか。ほら、あそこにちょうどシートが広げられそうな場所があるし。」

僕は、少し開いた場所を指差し言った。

「どこどこどこ！？よし！さっそく休憩ね！」

美樹がその場所に向かい猛ダツシユする。

「あれ？美樹ちゃん、元気だよ？」

真夜さん、その通りだね…。

僕は溜息を付きながら、美樹に付いて行った。

「真夜ちゃんも行きましょ？」

七海が真夜と手をつないで付いてくる。

こつこつ姿を見ると、まるで本当の姉妹のようだ。

僕は、横目で七海達のそんな姿を見て、そう感じた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881ba/>

『dejavu』

2012年1月14日13時54分発行